2008年5月発行

融會 YU・KWAI

ISSN 0917-0731

●核融合科学研究会ニュース 37●

CONTENTS

核融合科学研究会
第19回講演会開催報告
「現代人の心と土」
講演　陶芸家
　　第七代　加藤幸兵衛氏　2

事務局だより・編集後記　4

核融合科学研究会　第19回講演会開催報告
「現代人の心と土」
陶芸家　第七代 加藤幸兵衛氏

核融合科学研究会では、平成20年2月19日（火）核融合科学研究所管理棟4階第一会議室において第19回講演会を開催いたしました。

今回の講演会では、美濃陶芸の陶芸家として著名な第七代加藤幸兵衛氏（多治見市市の倉）をお迎えし、「現代人の心と土」に題し、美濃陶芸の歴史と今後への展開についてご講演いただきました。

第七代加藤幸兵衛氏は、国指定重要無形文化財保持者（人間国宝）第六代加藤卓男氏の長男として生まれ、日展、朝日陶芸展でそれぞれ最高賞を受賞するなど各陶芸展で高い評価を受け、人間の根源・本質をテーマに、鋭い現代感覚の作品を制作。近年は、加藤卓男のペルシア陶技を継承した作品を制作しておられます。現在は、社団法人美濃陶芸協会の会長として、美濃陶芸振興のため活動もされています。

幸兵衛窯には、ホームページ：http://www.koubei-gama.co.jp/ もございます。

以下、加藤氏の当日の講演内容を簡単にですが、紹介させていただきます。

近頃のニュースといえば日本中を大騒ぎにした中国餃子であろうか。我が家の冷蔵庫の中にも、中国製の冷凍食品がみつかり話題となった。アメリカではチャイナフリーとラベルをはることで商品が売れるようになっているとのこと。毎日、飲む水・食べるものはまさに我々の体を作る源である。「医食同源」は中国のことばである。今回の講演は、地元市の倉の陶芸家、七代目加藤幸兵衛氏による「現代人の心と土」である。陶芸家は土を扱う仕事である。それゆえ、加藤氏は「土とは何か」ということを常々考えるそうである。講演内容は、土を通して培われた哲学といった感慨深い話であった。

では、土とは何か。加藤氏の話を聞くと「万物を育むもの」、私見で恐縮であるが物理学では粒子を生成消滅させる「場」に通じるものという印象を受けた。土から生えた植物を動物が食べる。次にそれを肉食動物が食べる。人はなんでも食べる。土地の生態系が出来上がる。自らの足で旅した時代、その土地にあるものを人や動物は食べて生きてきた。この意味で人は土地と一体だった。野菜のとれないところに住むエスキモーは肉食中心である。なのに体には不調をきたさない。祖先から代を重ね体が適応した結果であろう。日本人の腸は欧米人に比べて長い。欧米人が肉食中心であるのに対し菜食中心の食文化によるといわれている。極端な例だが、南米には土をたべる民族がいるそうである。その土に含まれる成分がその土地で育ったジャガイモの毒を消す作用があるそうである。土地固有の病気を治療する薬はその土地に必ず見つかるというのが漢方の信念で、「身土不離」がその原理を説く言葉だそうである。

加藤氏が学生だった当時、汽車での帰省時、名古屋からいくつものトンネルを越えてようやく多治見に着く。最後のトンネルを越えて、町が眼前に開けたときの気持ちを加藤氏は「多治見色の細胞が呼応する」と表現した。筆者には、大学院在学中、中国人の同級生がいた。帰省で中国に帰ったところ現地の細菌に負けて発疹発熱しひどい目にあったと聞いた。日本に細胞が帰化した結果であろうか。筆者は北国の生まれでそこで育った。「内地」に渡り長いので、いまは寒いのは全く苦手である。だが、先日雪が降ってなんとはなしに落ち着くのを感じた。北国色の細胞のなせる技であろうか。

さて陶芸について。誰もが知るように土岐・多治見のあたりは古くから知られた陶器の産地である。平安から室町時代には窯は斜面に横穴を掘って作られた。陶器を作るには、材料となる土、火をおこすための木が必要ということで自ずと適した場所が決まってくる。土岐、多治見のあたりはこの条件が揃うところだった。また、昔の窯はある程度使うと落盤をおこし落盤すればまた新しく作り直す。そのため、土岐・多治見の山の斜面には窯のあとが無数に見つかるのだそうである。だから、この当時の陶器は、土地のものを使って作

❸

られる。陶芸師もまた窯の周りでとれたキノコや野菜、土地の獣を食べていた。作り手も材料もその土地のものだから、まさに美濃焼きという名を冠するにふさわしいものができた。現代ではどうかというと、どこからでも陶器作りの原料は調達できる。だから日本にいても外国の陶器と同様な物をつくることができる。情報伝達・交通手段の発展の賜物である。ただ、何々焼と称しても原料は全く違ったところからきているかもしれない。美濃の原料を使って中国で作ったら一体、なんと呼べばよいのだろうか。

加藤氏は地表を駆け巡るものを水平文化と呼ぶ。情報の共有化、流通の迅速化によって現代は水平文化全盛の時代である。一方、個人が土に根ざして培ってきた固有のものを垂直文化と呼んでいる。加藤氏は講演の中でイラク戦争について触れていた。アメリカが一方的に価値観を押し付けてゆく姿勢を「精神的な帝国主義」と呼び、政治における芸術、哲学の重要性について訴えた。イスラムの文化圏には、土地に根ざし有史以来培った思想・風習・文化があり独自の価値がある。文化の価値は相対的である。陶芸にとって良い土とは、一般に、粒子が細かいこと、耐火度があること、鉄分が少ないことだそうである。しかし、加藤氏にとっての良い土は中津川あたりでとれる土で耐火度のみ高いそうである。

「ふるさとはとおきにありて思うもの」という犀星の時代は、いまや過去のことになりつつある。郷土料理も都市にいて食べられるようになっているし、飛行機であっという間に帰省できるし、携帯でいつでもどこでも会話ができる。便利な一方、失ったものもある。加藤氏は、ロシアのエルミタージュ美術館（サンクトペテルスブルグ）にて展覧会を行った際、ロシア人の根（垂直文化）を理解するよう努めたそうである。サンクトペテルスブルグの土の香りがまだ健在なら幸いである。知人から聞いたが、今や、モスクワに寿司屋はあふれているとのこと。キャビアの寿司が土岐・多治見にも出回る日も近いのではと想像してしまう。人も陶器も土の化身、双方、生まれては消え土に帰る。画一化の波が押し寄せる中、静かに、自分の土を見直すのもよいのではないだろうか。

（文責：核融合科学研究所　藤澤彰英）

事務局だより

（1）平成20年度 評議員会・総会

日時　平成20年5月20日（火）14時30分より15時30分
場所　第二富士ホテル　富士の間
〒461－0005　名古屋市東区東桜2－10－24　TEL 052－931－1111
（名古屋市営地下鉄桜通線　高岳駅徒歩5分）

議題　第一号議案　平成19年度事業報告および収支決算報告について
第二号議案　平成20年度事業計画および予算（案）について
第三号議案　役員の改選・顧問の委嘱について

（2）平成20年度 特別講演会　15時40分より17時00分

講　師　大同工業大学　学長　澤岡　昭　氏
テーマ：もう直ぐ完成する国際宇宙ステーション

編集後記

平素は核融合科学研究会の活動に格別のご高配を賜りましてありがとうございます。
平成20年度会費納入のお知らせをいたしましたところ、早速にお取り計らいくださいまして誠にありがとうございました。
会員の皆様に、厳しき情勢にもかかわらず、当研究会の活動をご理解いただき、ご支援いただいておりますこと、感謝申し上げます。
今後とも、当研究会の活動ならびに核融合科学研究所への一層のご理解・ご支援をよろしくお願い申し上げます。

核融合科学研究会ニュース
第37号（2008年5月）

融　　會

編集・発行
核 融 合 科 学 研 究 会

〒509-5292　岐阜県土岐市下石町322-6
TEL 0572－58－0622／ FAX 0572－58－0626
E-mail：yu-kwai@tcp-ip.or.jp
URL：http://www.nifs.ac.jp/yu-kwai/index.html